神社への奉納物の変遷

――福島県白河市の勝善神社を事例に――

三津山　智　香

神社への奉納物の変遷
――福島県白河市の勝善神社を事例に――

三津山　智　香

1．はじめに

年中行事や人生儀礼、旅行のお土産やお裾分けなど、様々な形で人々は日々、物を贈ったり贈られたりしている。「贈答」や「贈与交換」などと呼ばれるこのような行為は、「ものやサービス、情報を巡る人びととの社会的相互作用」［伊藤　1995　225］である。

日本における贈答研究は、柳田國男による「食物と心臓」を始め、贈答の起源や歴史的変遷に着目して進められてきた［柳田　1990（1940）；沢田　1966；石塚　1961 など］。その後、贈答の果たす社会的な役割が明らかでない［別府　1976］といった批判から、数量的に贈答を捉える研究が発展することになる。このような研究で利用されたものが、祝儀帳・不祝儀帳、家計簿、日記といった贈答の記録である。贈答の品物だけでなく、いわば、当時の人間関係までもが保存されたこのような記録を用いることで、どのようなときに・誰が・何を贈るのか、という贈答の役割に着目した研究が展開され、そこに当事者への聞き書きを組み合わせることで、具体的な贈答の様相が浮かびあがることとなった［竹本　1981；板橋　1995；増田　2001；山口　2015 など］。

誰が何を贈るべきか、という認識には、贈答が行われた時代状況が反映される場合がある。昭和初期の香典帳の分析を行った有賀喜左衛門は「農産物その他の手製の手廻り品を贈与することはむしろ少なく、菓子、風呂敷、布類を買って持参するという方が多かった」ことから、「日常のあり合せの品ではならぬとする心持があ」ったことを指摘した［有賀　1968（1934）　208］。一軒の家の記録に基づき、昭和初期から現代までの約 70 年間の贈答を検討した山口睦も、昭和初期の贈答品の意識について、「昭和初期には、あるべき贈り物という共通の認識があり、たとえば米や餅などの贈答品は購入してでも贈られた」ものの、「自家製の農産物などは改まった贈答品としてはふさわしくないと考えられていた」［山口　2012　208］と、有賀と同様の指摘を行っている。しかし平成 13（2001）年の贈答では、「自給率が上がり、次第に商品作物としても廉価なものになった米、餅製品が贈与されなくなり、商品選択肢の増加にともない「なんでも買える」状況で、むしろ手をかけて特別に栽培した農産物が贈り物として好まれる状況にあった」［山口　同上］。これは、「相互扶助を目的とした実用的価値重視の贈与行為から、友好を深める、自分の楽しみの

ための贈与という、動機における個人的側面が肥大化した」［山口　同上］ためである。このように、贈答を行う際には、時代状況を反映した一定の共通認識に基づいて贈答品の選択が行われている。

これまでの贈答研究で着目されてきた祝儀・不祝儀、そして初節句や七五三といった、年中行事や人生儀礼における贈答では、贈り物をされた相手は、贈り物をした相手に対する返礼の義務を負うことになる。しかし、贈答行為の中には、贈り物をする対象が必ずしも返礼を行わない、もしくは返礼が困難な場合も存在する。最も顕著な例が、人と神仏との間で行われる贈答であろう。人と神仏との間で行われる贈答の場合、人が神仏に対して贈与を行ったとしても、神仏が受け取ったか否かは明確でなく、神仏からの返礼も明確ではない。そのため、人と神仏との贈答とは相互作用ではなく、「超自然的存在とこれを信仰する人びととの関係は、つねに人びとの一方的贈与とそれにともなう超自然的存在からの返済の期待が基調」［伊藤　1995　226］にあることとなる。

では、人から神仏への贈答では、どのようなものが奉納されてきたのか。神事の際に海の幸や山の幸、酒や米などを供物として祭壇に祀る。神社で祈祷を依頼する際、社務所で初穂料を支払う。灯篭や鳥居を個人や集落単位で寺社に奉納する。また、絵馬のように自身の願いを表現したものを寺社に奉納することもある。絵馬や灯篭、鳥居のようなものは後世まで残ることから研究の対象となりやすく、これまでにも絵馬の絵解きや寺社の信仰圏の広がり等に着目した研究が蓄積されてきた［西海　1999；堀内　2020 など］。しかし、絵馬や灯篭は、実際には寺社への奉納物の一部に過ぎない。例えば、寺社に参拝する際に賽銭箱に投げ入れる賽銭は、誰がいくら納めたのか、ということは記録に残りにくく、研究の対象となりにくいものであった。賽銭を扱った研究としては、石から米へ、そして現金へ、という変遷のプロセスが明らかにされてきたものの［新谷　2003；斎藤　2010 など］、奉納されていた具体的な米の量や現金への変遷過程、奉納物の選択に関わる共通認識については詳らかでない。人々は神社に参拝する際、何を奉納していたのか。また、奉納物の選択にはどのような共通認識がみられるのか。本稿では、福島県白河市表郷地区の勝善神社に残された「勝善神社受納帳」[(1)] を事例とし、これらの問に答えていく。

本稿で取り上げる「勝善神社受納帳」には、勝善神社の祭礼時に参拝者が持参した奉納物が記録されている。現存する「勝善神社受納帳」は、大正 7（1918）年から昭和 38（1963）年までの内、23 年分である [(2)]。この記録から、神社に参拝する際に持参した奉納物の変遷や、そこにみられる奉納物の選択に至る共通認識を検討していく。「勝善神社受納帳」に記された品物は、勝善神社の神職を務めていた S 家では「初穂料」や「賽銭」と呼ばれ、地域の人々には、東京女子大学による報告にあるように「おさい銭」と呼ばれることが多い［東京女子大学文理学部民俗調査団 1989　93］。本稿では、神社の祭礼時に参拝した人々が持参した物の総称として「奉納物」を用いることとする。

以下、第 2 章において、勝善神社の建立されている福島県表郷地区、及び、勝善神社について

記述した後、第3章で「勝善神社受納帳」に記された奉納物を年代別にみていくことで、奉納物の変遷を示す。後述するように、「勝善神社受納帳」に記された奉納物は、白米、金銭、白米・金銭以外に分けられることから、それぞれについて詳述する。そして、第4章では、第3章から明らかになった奉納物の変遷に考察を加えることで、奉納物に対する当時の人々の共通認識を明らかにする。その際、特に白米と金銭との関わりに着目することで、当時の奉納物の選択基準の一端を示す。

筆者は、令和元（2019）年8月から令和2（2020）年10月にかけて、代々勝善神社の神職を務めてきたS家に保管されている「勝善神社受納帳」の写真撮影、そして、現在のS家の当主（昭和10（1935）年生・男性。以下、「ST氏」と記述する）や祭礼が行われていた頃を知る表郷地区の人々に対し、祭礼の様子や当時の生活、「勝善神社受納帳」に記された人物についてのインタビューを行った。本稿の内容は、これらの調査に基づいている。

2．調査地概況と勝善神社の祭礼

2－1．調査地概況

勝善神社は、福島県白河市表郷地区に鎮座する神社である。表郷地区は、昭和30（1955）年に古関村・社田村・金山村の三村が合併して誕生した表郷村にあたる地域であり、平成17（2005）年に大信村・東村・白河市と合併し、現在の白河市表郷地区となった。

駅や商業施設が立ち並ぶ市街地に比べると、表郷地区は水田が広がる田園地帯である。しかし、農業従事者の割合は昭和35（1986）年に79%に達して以降減少に転じ、現在も農業従事者は年々減少傾向にある［表郷村史編さん委員会編　2008　459］。現在の産業別就業者数をみると、第一次産業従事者が6.6%、第二次産業従事者が37.7%、第三次産業従事者が55.7%である[(3)]。農業が盛んであった頃は、養蚕を行う家や葉タバコの生産を行う家が多く、昭和30年代までは牛馬の飼育も盛んであった。馬の用途は、農耕や運搬、厩肥生産、そして、繁殖を行いセリで売り、収入を得ることであった。

昭和38年まで、白河町（現在の白河市）で馬市が行われていた。馬市が開かれるのは、3月上旬の5日間と、9月下旬～10月上旬までの7～10日間の年に2回であった。特に、9月下旬～10月上旬にかけて行われる馬市は盛況であったという［金子　2014　6-7］。ウマイチにはバクロウが全国各地から集まるだけでなく、白河市に隣接する西郷村には軍馬補充部白河支部が設置されていたことから、第二次世界大戦終戦までは軍馬の購買官も訪れていた。

現在の白河市やその周辺の地域では馬産が盛んであったことから、馬の健康や繁殖、高値で売れることなどを祈願するための神仏が信仰され、石碑や神社が建立された。それが、馬頭観音や勝善神社である。

表郷地区には2社の勝善神社が建立されており、それぞれに源義経の伝説が残る。一方の勝善神社は、表郷地区の内松にある。兄の頼朝が鎌倉で平家討伐の兵を挙げたことを聞いた義経が鎌倉に駆け付ける途中、内松で愛馬が亡くなったため、埋葬した。それを聞いた村人が駒形勝善様を祀り、牛馬の守り神にしたことが内松の勝善神社の由来である［表郷村史編さん委員会編 2008　371］。もう一方の勝善神社は、表郷地区の高萩にある、義経の亡くなった愛馬の脛を祀った神社である。社殿の傍には、義経の亡くなった愛馬の姿が映ったとされる、駒形の泉がある。現在、駒形の泉は枯れており、石碑だけが泉の存在を示しているが、かつては日照りでも水が枯れることがなかったという［表郷村史編さん委員会編　同上］。本稿で対象とするのは、高萩の勝善神社であり、本稿において断りなく「勝善神社」と記す際には、高萩の勝善神社を指すこととする（写真1）。勝善神社の建立は承安4（1174）年である。個人の所有する神社であり、境内には近隣の集落等から奉納された、鳥居や灯篭がみられる。

勝善神社に一年で最も多くの参拝者が訪れたのは、旧暦1月21日に行われる祭礼時であった。祭礼時以外にも、馬が病気になったときや難産のときに参拝に訪れる人が少なくなかったようである。仔馬が無事に生まれた際にも参拝する人があり、勝善神社に参拝すると、母馬の乳の出が良くなったり、母馬が仔馬を噛まなくなるともいわれた。仔馬が産まれて7日目にあたるシチヤや、21日目にあたるオビヤの際には、赤飯を持って勝善神社にお礼参りに来る人も少なくなかった。ST氏は幼いころ、馬の飼い主たちが赤飯を持ってお礼に来ていた姿をよく覚えており、仔馬が生まれる4～5月ころは、「赤飯は食べ飽きた」ほどであったという。馬がセリで高く売れた際等に、絵馬や写真を奉納していく人もあった（写真2）［表郷村史編さん委員会編　2008　372-373］。

S家では、神社に参拝した人や牛馬に対して牛馬の安産祈願や病気平癒祈願を行っていただけでなく、「厩祈祷」として家々に出向いて行うこともあった。

表郷地区には勝善神社の他に、馬頭観音の石碑が建立されている。表郷村文化財保護審議会の

写真1　勝善神社
（令和元年8月19日　筆者撮影）

写真2　勝善神社に奉納された絵馬
（令和元年8月19日　筆者撮影）

行った調査によると、表郷地区には242基の馬頭観音が建立されている。その内約7割は近代以降の建立であり、明治期の建立が20.4%、大正期が14.3%、昭和期が38.8%である［表郷村文化財審議会編　2001　頁なし］。馬頭観音以外にも、第二次世界大戦に出征した軍馬のための「征馬記念碑」や「陸軍徴馬記念碑」といった石碑も建立されている［表郷戦争回顧展実行委員会編2014］。馬頭観音や征馬碑では、勝善神社のような祭礼は行われていない。これらの石碑は、「生きている馬のためというよりは、死んだ馬のため」（昭和7（1932）年生・男性）という意識があったようである。

2－2. 勝善神社の祭礼

本稿で取り上げる「勝善神社受納帳」は、毎年旧暦1月21日に行われる勝善神社の祭礼時の記録である。大正7年～昭和38年の45年間のうち、大正7・8・13～15年、昭和3・5～10・12・14・17・18・33～38年の、計23年分が現存している。昭和39（1964）年以降の祭礼には参拝者が訪れることはなく、S家で神事を行うのみである。現在祭礼を主体的に行うST氏は神職の資格は所有していないものの、神職であった父の姿を見ていたことから見よう見まねで祭日に祝詞をあげている。「勝善神社受納帳」はすべてS家に保管されており、「勝善神社の馬産信仰資料」として福島県白河市指定の重要有形民俗文化財に登録されている[(4)]。「勝善神社受納帳」の主な記録者は、当時神職を務めていたST氏の父であった。ST氏の父は昭和17（1942）年から昭和20（1945）年ころまで出征していた。出征中も祭礼が行われていたが、誰が祭礼や記録を行っていたかは不明である。

「勝善神社受納帳」は、横帳の体裁をとっている。文字はすべて墨で書かれており、帳面の表紙には、祭礼が行われた年月日、「勝善神社受納帳」のような表題、そして、奉納物を受け付けていたS家を示す「勝善神社社務所」の文字が記載されている（写真3）。帳面には、勝善神社の祭礼

写真3　「勝善神社受納帳」の表紙
（令和2年11月1日　筆者撮影）

に、どこに住む誰が何を持ってきたのか、が記録されている（写真４）。居住地は記されていない場合もある。昭和８（1933）年からは「安産祈願」のような祈願内容が、そして、昭和10年からはタテゴの貸借の記録が併記されるようになっていく。タテゴとは、馬につける頭絡のことであり、農耕で馬を使う際、轡につけて使用していた（写真５）。ST氏によると、勝善神社に奉納されているタテゴをつけるとお産が軽くなる、と言われており、出産が近い馬の飼い主が借りていくことがあったという。無事にお産した馬の飼い主が新しくタテゴを奉納することもあった。帳面の最後の頁には、米の合計と金額の合計が記されているものもある（写真６）。

勝善神社では、毎年旧１月20日に宵祭りが、翌21日に本祭りが行われる。「勝善神社受納帳」

写真４　「勝善神社受納帳」の記述例
（令和２年11月１日　筆者撮影）

写真５　タテゴ
（令和２年11月１日　筆者撮影）

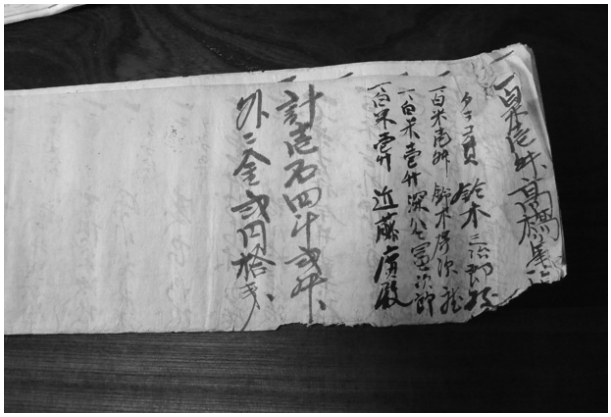

写真６　「勝善神社受納帳」の最終頁
（令和２年11月１日　筆者撮影）

が作成されたのは、旧１月 21 日の本祭りである。祭礼は神職を務めるＳ家が主体となって行う。参拝者は表郷地区だけでなく、白河市内各地、棚倉町、そして、栃木県北部などから訪れ、遠方の集落からは代参が行われることがあった。『表郷村史　第三巻　民俗編』には「祭りの当日はガラ店（露店）がたくさん出て、当時の子ども達は正月にもらった小遣いをこの時に使うのを楽しみにしていた」［表郷村史編さん委員会編　2008　371］という祭礼の賑やかさがうかがえる記述がある。また、祭礼の日には神社に種馬が 2、3 頭つないであり、参詣に来る人びとはつながれた種馬を見て、種付けにふさわしい馬かどうかを判断したり、種付けの参考にしたりしていたようである［表郷村史編さん委員会編　2008　372］。

ST 氏によると、祭礼当日の参拝者の動きは次のようになっている。まず、参拝者は社務所を兼ねているＳ家に行き、持参した奉納物を渡す。その後、神社に参拝してから駒形の泉で浸した笹 (5) を受け、Ｓ家に戻る。Ｓ家に戻ると、勝善神社の出す牛馬守護の護符を受け、Ｓ家で食事をとった後、帰宅する。帰宅後、勝善神社で受けた笹を家の牛馬に与える。この笹を与えると、良い牛馬が育つとされているためである。勝善神社で受けた護符は、厩の角に勝善様の神棚に納める家が多かったようである［表郷村史編さん委員会編　2008　373］。

「勝善神社受納帳」から明らかになった勝善神社の祭礼への参拝者数は、図１のようになっている。ST 氏によると、参拝者の中にはＳ家に奉納物を納めず、直接勝善神社に参拝する人もいたため、「勝善神社受納帳」に記されていない参拝者もいたという。そのため、ここに示した数は参拝者すべてを表しているわけではないが、概要をつかむことはできるであろう。図１をみると、大

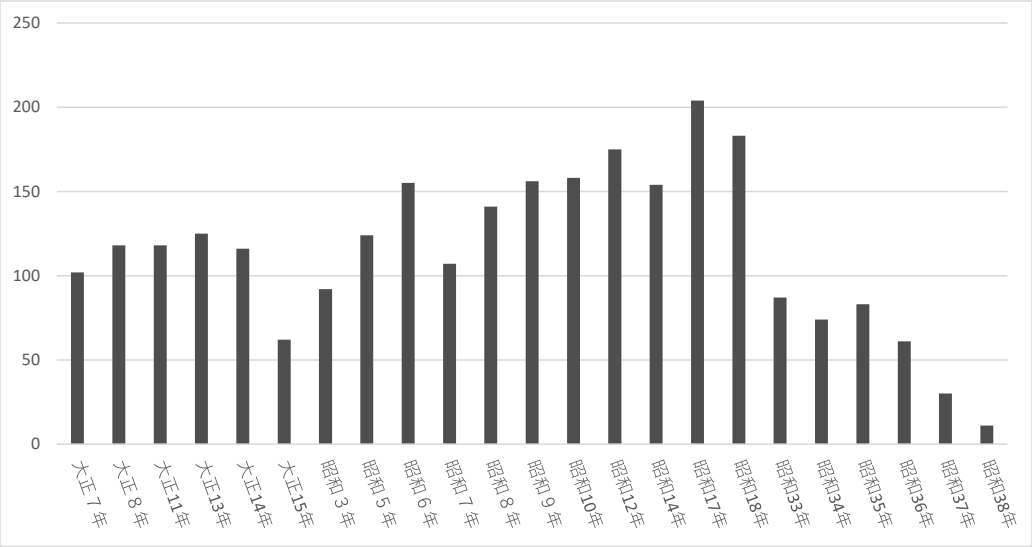

図１　参拝者数の変遷
（「勝善神社受納帳」に基づいて筆者作成）

正期から昭和 10 年代までの参拝者数は増加傾向にあるものの、以降は減少に転じ、最後の記録である昭和 38 年には最も参拝者が多かった昭和 17 年の約 5%にまで減少している。

勝善神社の祭礼への参拝者数の変化を、当時の白河市の馬市の状況と併せてみていきたい。白河市の馬市の様子は、地域の新聞に取り上げられており、その盛衰をうかがうことができる[(6)]。第二次世界大戦中は軍馬需要の高まりから、「第一線勇士とともに無言の戦士として、共栄圏確立の大任を担ふ馬の増産は、国をあげて拍車がかけられ」［金子　2014　83］ており、馬市も活気を呈していた。しかし終戦を迎え、昭和 25（1950）年 9 月 30 日の『県南新聞』には「白河馬市を生かせ」というタイトルの記事があり、「馬に、需要範囲は甚だしく狭いものと化している。これはトラック・ダットサン・自動耕運機などの機械力の全国的な普及に伴う、必然の成行き」［金子同上　97］と記されていることから、昭和 20 年代半ばには馬市が目に見えて衰退していったことが推察される。現存する「勝善神社受納帳」に昭和 20 年代分が欠けているため参拝者数の詳細は不明であるが、農業用機械等の普及によって馬の飼養が減少し、それと時を同じくして勝善神社の祭礼への参拝者も減少していったと推察される。最後の「勝善神社受納帳」が作成された昭和 38 年は白河市の最後の馬市が行われた年でもある[(7)]。この年で勝善神社の祭礼が行われなくなることから、昭和 38 年は白河地域の馬産にとって大きな区切りの年になったと考えられる。このように、馬市、そして、馬産の盛衰が勝善神社への参拝者に影響を与えている様子がうかがえる。

3．奉納物の変遷

本章では、「勝善神社受納帳」の記述から、どのような奉納物がみられたのかを示す。

表1　記載された奉納物の種類の変遷
（「勝善神社受納帳」に基づいて筆者作成）

年	種類	年	種類
大正7年	21	昭和10年	6
大正8年	21	昭和12年	9
大正11年	12	昭和14年	11
大正13年	16	昭和17年	17
大正14年	10	昭和18年	7
大正15年	5	昭和33年	8
昭和３年	4	昭和34年	9
昭和５年	6	昭和35年	4
昭和６年	4	昭和36年	5
昭和７年	2	昭和37年	1
昭和８年	9	昭和38年	3
昭和９年	10		

現存する「勝善神社受納帳」23 年分の記録の中には、20 種類を超える奉納物の品名が記録されていた。奉納物の種類を年ごとに示した表 1 をみると、大正年間は奉納物の種類が多いものの、時代が新しくなるにつれて種類が少なくなっていく様子がうかがえる。

奉納された奉納物の種類が最も多かったのは、大正 7（1918）年と大正 8（1919）年である。大正 7・8 年の奉納物の種類を示すと、表 2・3 のようになる。この 2 年の状況をみると、白米一升の奉納者が多く、両年とも参拝者の 7 割ほどが白米一升、もしくは、白米一升に金銭等を併せて奉納している。白米に次いで多いのが金銭の奉納であり、5 銭～ 90 銭までの奉納がみられる。白米と金銭以外にも、餅や蝋燭、手拭等が奉納されている。

大正年間には多くの種類の奉納物がみられたものの、昭和に入る頃には奉納物の種類は減少していく。昭和初頭で最も奉納物の種類が少ない昭和 7（1932）年は、全参拝者 107 人中、106 人が

表2　大正 7 年の奉納物の組み合わせ（大正 7 年の「勝善神社受納帳」に基づき、筆者作成）

奉納物	人
1 白米一升	57
2 白米壱升＋手拭	6
3 白米壱升＋手拭＋塩釜	2
4 白米壱升＋金弐拾銭	1
5 白米壱升＋ 𠮟 餅	1
6 白米壱升＋■オ餅（二枚）	1
7 白米壱升＋手拭晏楮	1
白米が含まれる奉納物計	69
8 金弐拾銭	7
9 金拾銭	6
10 金拾銭＋手拭	3
11 金拾五銭	2
12 金五銭	2
13 金弐拾五銭＋手拭	1
14 金四拾銭	1
15 金弐拾銭＋手拭＋塩釜	1
金銭が含まれる奉納物（白米を除く）計	23
16 手拭＋塩釜	3
17 手拭壱本	2
18 金拾銭＋塩かま	2
19 をきな餅（二枚）	1
20 𠮟餅（二枚）	1
21 手拭	1
白米・金銭以外の奉納物計	10
合計	**102**

表3　大正8年の奉納物の組み合わせ（大正8年の「勝善神社受納帳」に基づき、筆者作成）

奉納物	人
1 白米壱升	65
2 白米壱升＋金拾銭	2
3 白米壱升＋手拭	9
4 白米壱升＋年始	1
5 白米壱升＋手拭＋金拾銭	1
6 白米壱升＋金弐拾銭	1
7 白米壱升＋手拭一本＋拝餅	1
8 白米壱升＋塩可ま	1
白米が含まれる奉納物計	81
9 金拾銭	7
10 金弐拾銭	11
11 金弐拾銭＋手拭	2
12 金参拾銭	2
13 金参拾銭＋手拭	1
14 金四拾銭	3
15 金五拾銭	3
16 金五拾銭＋手拭	1
17 金九拾銭	1
金銭が含まれる奉納物（白米を除く）計	31
18 手拭弐本	1
19 手拭＋ヨウカン	1
20 手拭＋𠮟餅	2
21 餅壱重	2
白米・金銭以外の奉納物計	6
合計	**118**

白米一升を奉納し、1名が白米一升と5銭を奉納しており、白米一升の奉納が圧倒的に多い。昭和年間で最も奉納物の種類の多かった昭和17年も、白米・金銭の奉納が大部分を占めており、大正7・8年にみられたような奉納物の多様性はうかがえない（表4）。昭和17年は白米と金銭の組み合わせが豊富になっていることが、奉納物の種類が増加した要因である。このことから、昭和初期には白米と金銭、特に白米一升が奉納物として選択されていたことが指摘できる。

昭和30年代に入ると、奉納物の種類に若干の増加がみられる。昭和30年代で最も奉納物の種類が多い昭和34（1959）年の奉納物を例としてみると、昭和10年代同様、白米一升単体の奉納が圧倒的に多く、白米と金銭、もしくは他の奉納品を組み合わせることで奉納品の種類が多くなっていた様子がうかがえる（表5）。昭和34年には、清酒や粳米といった白米と金銭以外の奉納がみられるものの、それらは白米と併せて奉納されている。金銭のみの奉納者は全体の約5％であり、それ以外は白米一升、もしくは白米一升に他の品物を組み合わせての奉納であることから、昭和10年代までと同様、白米一升が主要な奉納物であったことがうかがえる。奉納物の種類が最も少

表4　昭和17年の賽銭内訳
（昭和17年の「勝善神社受納帳」に基づき、筆者作成）

奉納物	人
1 白米一升	150
2 白米一升＋祈	4
3 白米一升+外一円	1
4 白米一升+年始	1
5 白米壱升＋タテゴ	1
6 白米壱升＋タテゴ貸	1
7 白米壱升＋タテゴ借	1
8 白米三升	1
白米が含まれる奉納物計	160
9 金五拾銭	29
10 金壱円	3
11 金参拾銭	2
12 金五拾銭＋祈祷	1
13 金五拾銭＋タテゴ返納＋願解	1
14 金弐円	1
金銭が含まれる奉納物（白米を除く）計	37
15 タテゴ貸	3
16 タテゴ借	3
17 タテゴ奉納	1
白米・金銭以外の奉納物計	7
合計	**204**

表5　昭和34年の賽銭内訳
（昭和34年の「勝善神社受納帳」に基づき、筆者作成）

奉納物	人
1 白米一升	61
2 白米一升+外五十円	1
3 白米一升＋祈	4
4 白米一升＋安産祈願	1
5 白米一升+清酒壱升	1
6 白米壱升＋粳米壱升	1
7 白米弐升	5
白米が含まれる奉納物計	74
8 金壱百円也	3
9 金弐百円也	1
金銭が含まれる奉納物（白米を除く）計	4
合計	**78**

なかった昭和 37（1962）年に至っては、奉納物は白米一升の 1 種類のみであった。

ここまで記述してきたように、大正期には多くの種類がみられた奉納物は、昭和に入る頃から白米一升が大部分を占めるようになり、金銭での奉納も少数ではあるものの行われるようになっていく。このような奉納物の状況から、奉納物を、白米、金銭、そして、白米・金銭以外の 3 つに分類することができる。そこで、3 種類それぞれの奉納者数の変化、そして、奉納物の組合せ等について詳しく記述していく。

a）白米

23 年分の記録を通して最も奉納者数が多かったのが、白米一升の奉納である。白米一升、もしくは白米に金銭等を併せて奉納した人の割合を示すと、図 2 のようになる。どの年も半数以上の人が白米一升、もしくは、白米一升とその他の奉納物を組み合わせて奉納している。

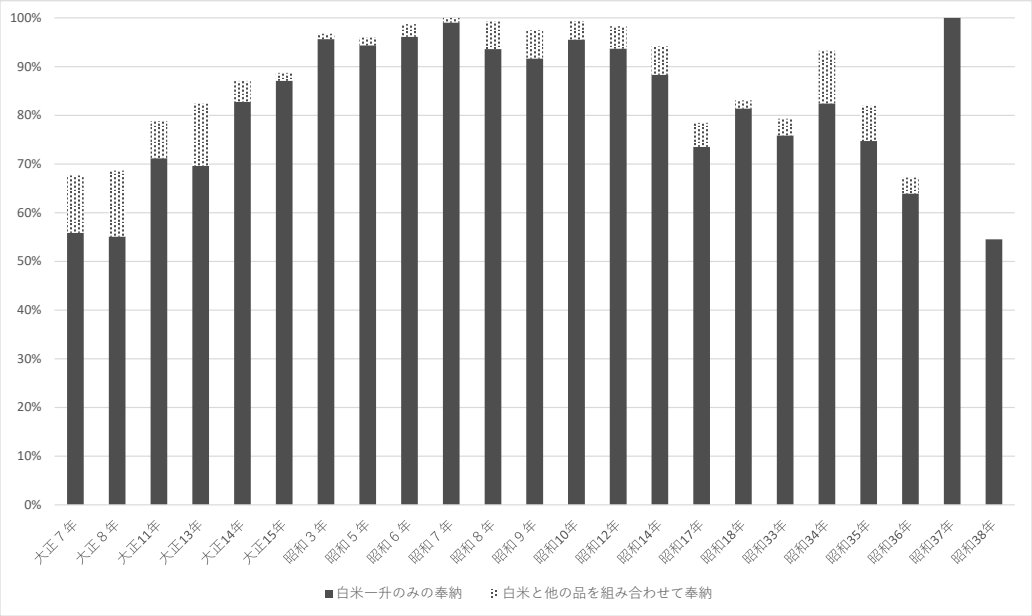

図2　白米一升、及び、白米一升に他の品を組み合わせた奉納者数の割合
（「勝善神社受納帳」に基づき筆者作成）

年を追ってみていくと、大正 7・8 年は、白米一升を奉納した割合が他の年に比べて低いものの、以降は白米一升の全奉納物に占める割合が高くなって行く。昭和 30 年代は年によって白米一升を奉納する割合の変動が大きいものの、最後の祭礼が行われた昭和 38 年まで、白米一升が最も多い奉納物であり続けた。昭和 37 年にはすべての奉納者が白米一升を奉納していたものの、翌昭和 38 年は半数を少し超えた程度と白米一升の奉納の割合は大きく減少している。図 1 に示したよ

うに、昭和 38 年の参拝者数は昭和 37 年の半数以下にまで減少しているため、明確に結論づけることはできないが、昭和 38 年以降、奉納物が白米一升から金銭へ移り変わっていくことが予想される。

白米は二升、もしくは三升奉納される場合もあった。白米二升は昭和 10 年から見られたが、このときの白米一升の奉納者が 151 人であったのに対し、白米二升は 2 名である。昭和 34 年に 5 名、昭和 35 年に 6 名の奉納者がみられるが、この時も白米一升の数が昭和 34 年は 61 名、昭和 35 年は 62 名であり、白米一升の奉納者の方がはるかに多い。また、白米三升は昭和 17 年に一人から奉納があったのみであり、他の年にはみられなかった。このことから、白米を奉納する場合には、一升が当時の基準となっていたことがうかがえる。

b）金銭

金銭の奉納は、全ての奉納物が白米一升であった昭和 37 年以外のすべての年でみられる。図 3 は、金銭単体、もしくは、金銭に白米などを組み合わせた奉納物の割合を年ごとに示したものである。金銭の奉納は大正年間に多くみられたものの、昭和に入ると減少し、昭和 10 年代後半から昭和 30 年代にかけて再び上昇傾向を示している。図 2 に示した白米一升のグラフとは対称的な波を描いている。奉納する金額にも変化がみられる（図 4）。時代が新しくなるほど奉納金額が上昇する傾向がうかがえるが、大正 8 ～ 15（1926）年に増加した 40 ～ 90 銭の奉納が昭和に入ると減少し、一時的に 5 ～ 30 銭の奉納が多くなる、という奉納金額が減少する時期もある。そして、昭和 10 年代後半から再び 40 ～ 90 銭、1 ～ 5 円単位の奉納が増加し、昭和 30 年代には 50 円以上の奉納が行われるようになっていく。また、奉納される金額はすべて 5 銭刻みであり、28 銭や、63 銭のような金額での奉納はみられなかった。5 銭刻みの中でも、25 や 35 のような金額よりも、20、30 のような数が選ばれる傾向にある。以下、奉納金額の変遷について記述していく。

5 ～ 15 銭は、大正 7 年～昭和 14（1939）年までに 48 名から奉納された。奉納されたのは、5 銭、10 銭、15 銭である。この層の金額の奉納が多かった時期は、大正 7･8 年である。最も金額が少ない金 5 銭は、大正 7 年に 2 名、昭和 12（1937）年に 1 名みられるのみである。すべて 5 銭単体での奉納であった。10 銭は大正 7 年から昭和 14 年の間に合わせて計 41 名からの奉納がみられ、そのうち約半数の 21 名は現金単体で、残りの 20 名は現金に白米や手ぬぐい等を併せて奉納していた。15 銭は大正年間に 4 名から奉納されており、昭和に入ってからの奉納はみられない。すべて 15 銭単体で奉納されていた。

20 ～ 30 銭は、大正 7 年～昭和 34 年にかけて 75 名から奉納されており、特に大正年間に多い。奉納された金額は、20 銭、25 銭、30 銭である。20 ～ 30 銭の中で最も多いのは、20 銭単体での奉納である。20 銭単体での奉納が 39 名であったのに対し、白米一升や手拭等と併せて 20 銭を奉納したのは 12 名であった。25 銭や 30 銭の奉納は、20 銭に比べて少ない。25 銭は単体での奉納

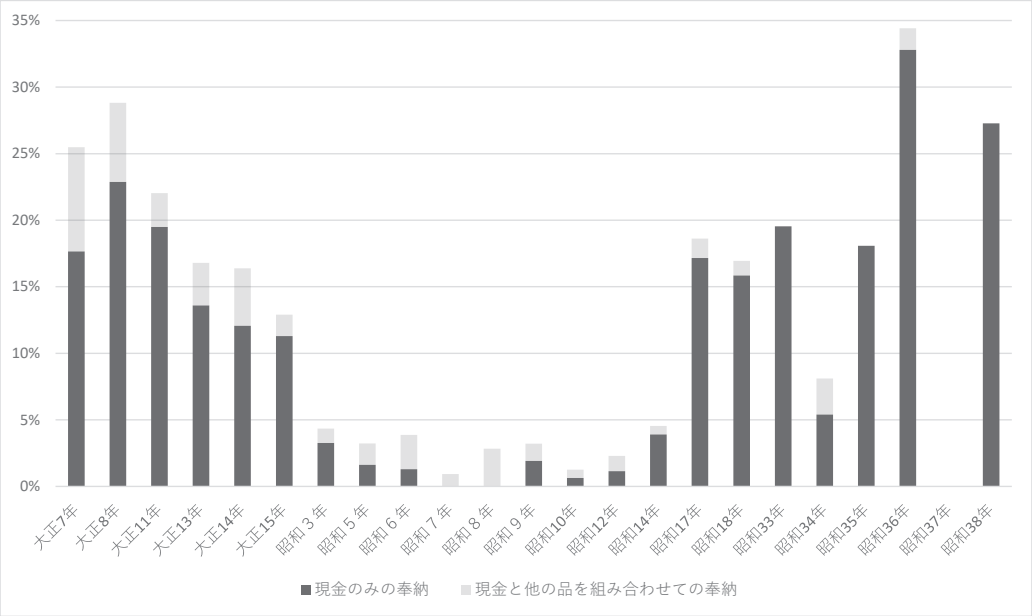

図３　賽銭に金銭が含まれる割合
（「勝善神社受納帳」に基づき筆者作成）

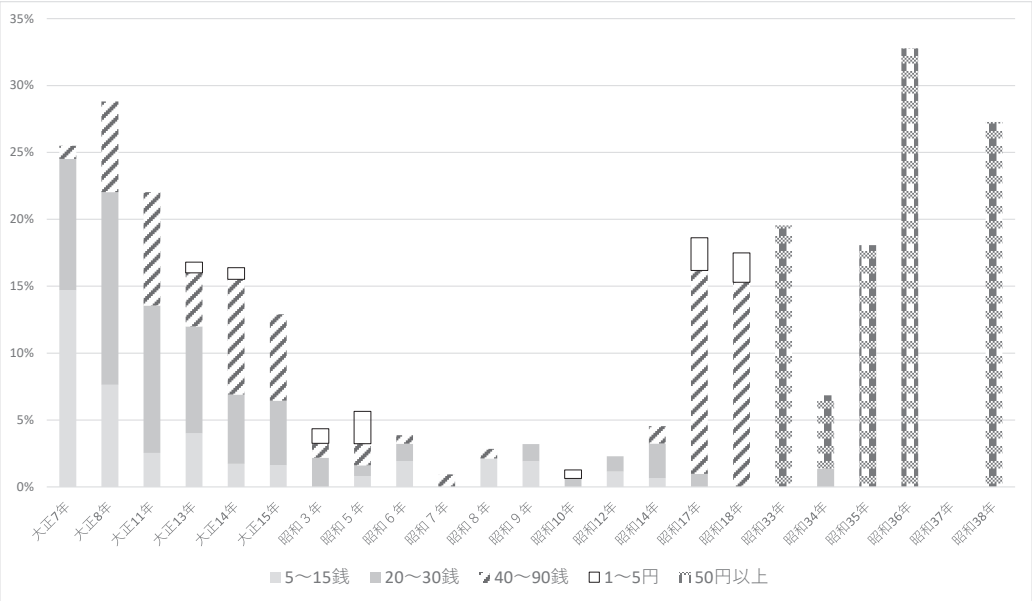

図４　奉納金額別の割合
（「勝善神社受納帳」に基づき筆者作成）

が 3 名、白米一升、もしくは手拭と併せて奉納した人がそれぞれ 1 名ずついた。30 銭は単体での奉納が 18 名であったのに対し、手拭と併せて奉納した人が 1 名であった。昭和 14 年に奉納された 30 銭は括弧書きで「白米代」と記されていた。

40 ～ 90 銭は、大正 7 年～昭和 18（1943）年までに 96 名から奉納された。奉納されたのは、40 銭、50 銭、90 銭である。40 銭は大正 7 ～ 14（1925）年の間に 7 名が奉納しており、いずれも 40 銭単体であった。90 銭は大正 8 年に 1 名が単体で奉納しているのみである。40 銭、90 銭の奉納が少ないのに対し、50 銭の奉納は、単体で奉納した人が 83 名、手拭と併せて奉納した人が 1 名、そして、50 銭と併せて祈祷を依頼している人が 4 名と、金銭の奉納の中で最も高い数字を示している。中でも、昭和 17 年、18 年はそれぞれ 31 名、27 名が 50 銭を奉納しており、この時期が 50 銭の奉納のピークであった。

1 円以上の奉納は大正 13（1924）年からみられるが、円の単位での奉納が多くを占めるようになるのは、昭和 30 年代である。円単位の奉納で最も早いものは大正 13 年の 5 円 20 銭である。これは代参講による奉納であり、講員から集めた金銭をまとめて奉納したものと考えられる。昭和 3（1928）年にも 4 円 80 銭の奉納がみられるが、これも同じ講中からの奉納である。個人による 1 円の奉納は、大正 14 年～昭和 18 年に 9 名から行われている。1 円単体での奉納は、大正 14 年に 1 名、昭和 17 年、18 年にそれぞれ 3 名おり、白米一升と併せての奉納は昭和 10 年と 17 年に 1 名ずつであった。2 円は昭和 17 年に 1 名から奉納されたのみである。

50 円以上の奉納は、昭和 33（1958）年以降に 50 名が行っていた。奉納された金額は、50 円、100 円、200 円である。この金額で白米と併せて奉納されていたのは 50 円のみで、昭和 34 年と 36 年に 1 人ずつ奉納している。50 円単体での奉納は、昭和 33 年に 2 人からあった。50 円以上の奉納で最も多かったのは、100 円の奉納で、昭和 33 年から 38 年の間に 32 名の奉納があった。200 円の奉納は、昭和 33 年から行われており、昭和 36（1961）年の 14 名が最も多かった。すべて 200 円単体での奉納であった。

c）白米・金銭以外

表 6 に示したように、米・現金以外の奉納物は、大正 7 年から昭和 34 年にかけて 28 名から奉納された。白米・金銭以外の奉納物の割合は昭和年間よりも大正年間の方が高い。白米・金銭以外の奉納物は、餅や菓子、大豆、清酒といった食品、そして、手拭や蝋燭のような日用品に大別される。表 6 に挙げた奉納物のうち、単体で奉納されていたのは餅と手拭であり、他の奉納物は白米一升や、「手拭とヨウカン」、「手拭と𡚁餅」のように何かと併せて奉納されていた。

奉納された食品の内、「塩かま」や「翁餅」、「ヨウカン」は、現在も和菓子屋に売られる菓子であり、購入したものを奉納していたと考えられる。また、手拭や蠟燭も、購入したものを奉納していたと考えられる。

白米・金銭以外の品目では、詳細が不明なものもある。一つは、「𦼮餅」と「拝み餅」である。現在このような名称の餅はみられず、購入したものか、参拝者が自宅で搗いたものかも不明である。もう一つは、「御年始」である。御年始単体で奉納されることはなく、白米一升と併せて奉納されていた。どのようなものが御年始として奉納されていたのかは記載されていない。また、昭和５（1930）年に奉納された「宗寿料」についても、詳細は定かでない。祈祷を行った料金と考えられるが、白米か金銭か、もしくはそれ以外かの記載はない。

表６　白米・金銭以外の奉納物
（「勝善神社受納帳」に基づき、筆者作成）
＊「全参拝者中の割合」は、各年の全参拝者の内、白米・金銭以外の奉納の割合を算出したものである

奉納物	大正7年	大正8年	大正13年	大正14年	昭和5年	昭和８年	昭和９年	昭和17年	昭和34年	計（人）
一重ね		2					1			**3**
オソナイ餅２つ				1						**1**
をきな餅（二枚）	1									**1**
𦼮餅（二枚）	1									**1**
糯米壱舛									1	**1**
糯米二舛						1				**1**
清酒壱升									1	**1**
大豆						2				**2**
手拭（手拭一本、含む）	3									**3**
手拭＋塩釜	3									**3**
手拭＋ヨウカン		1								**1**
手拭＋𦼮餅		2								**2**
手拭弐本		1								**1**
タテゴ奉納								1		**1**
宗寿料					3					**3**
御年始			2							**2**
蝋燭十把			1							**1**
計（人）	**8**	**6**	**3**	**1**	**3**	**3**	**1**	**1**	**2**	**28**
全参拝者中の割合	7.8%	5.1%	2.4%	0.9%	2.4%	2.1%	0.6%	0.5%	2.7%	

d）祈祷とタテゴの貸借

最後に、奉納物とあわせて「勝善神社受納帳」に記載されている、祈祷とタテゴについても記述する。第２章で記述したように、S 家では日常的に厩祈祷を行ったり、馬が難産のときなどに参拝した人々に対して祈祷を行っていた。馬や祈祷には「勝善神社受納帳」とは異なる名簿が残っており、突発的な依頼については記録が残されていなことから、「勝善神社受納帳」に記録された祈祷は、祭礼当日に依頼されたものである可能性が高い。

「勝善神社受納帳」に記された祈祷とタテゴの貸借は、表７に示した通りである。祈祷には、安産祈願、祈祷、祈、願解き、の記述がみられた。安産祈願以外は祈願内容が定かではないが、牛馬守護に関わる神社であることから、奉納者の飼育する牛馬の健康や安産、市場で高く売れること、といったことが祈願されたと推察される。

祈禱単体での記載はなく、いずれも白米一升、もしくは金銭に併記されている。祈祷を受けるための奉納物に決まりは無かったようであり、奉納物には個人差がみられる。最も多かったのが、白米一升との組み合わせである。白米一升と祈は、昭和 9（1934）年から昭和 33 年にかけて 15 人分の記述がみられる。次いで、白米一升と安産祈願が 4 名、白米一升に 10 銭を加えて安産祈願を行った人が 2 名であった。金銭と祈祷の組み合わせもある。昭和 18 年には 1 円に加えて祈祷、昭和 33 年に 100 円に加えて祈祷を依頼する人があった一方で、昭和 34 年に 20 銭で安産祈願を行った人がいるなど、年を追うごとに金額が高くなる、という傾向は一概には指摘できない。

タテゴの貸借では、タテゴ貸、タテゴ借、の記述がみられた。奉納物の記載が無く、タテゴの貸借のみが記されている場合もある。「タテゴ貸」、「タテゴ借」は双方共に、勝善神社に奉納されていたタテゴを参拝者が借りていったものと考えられるが、貸・借の差異については不明である。第 2 章で記述したように、勝善神社に奉納されたタテゴを馬につけると安産になると言われていたことから、出産を控えた馬の飼い主たちがタテゴを祭礼時に借りに行ったものが記録されたと推察される。S 家では明確な貸借料の基準は無かったようであり、タテゴの貸借の記録が多かった昭和 17 年には、奉納物の明記されていない「タテゴ貸」「タテゴ借」が 3 名ずつみられた。昭和 12 年には 30 銭を奉納した人がタテゴを借り、昭和 18 年に 50 銭をタテゴ代としている記録に加え、昭和 17 年にはタテゴを返納した際に願解を行い 50 銭を奉納している記録があることから、「タテゴ貸」「タテゴ借」のみの記載の場合は、タテゴの返納時に白米や金銭などを奉納していたと考えられる。

表7　祈祷とタテゴの奉納
（「勝善神社受納帳」より筆者作成）

奉納物	昭和５年	昭和８年	昭和９年	昭和10年	昭和12年	昭和14年	昭和17年	昭和18年	昭和33年	昭和34年	計
白米一升＋安産祈願		1	3								**4**
白米一升+外十銭＋安産祈願		1	1								**2**
白米一升＋祈			2	1		4	4	2	2		**15**
白米一升+代読			1								**1**
白米一升＋タテゴ				2	1		1				**4**
白米一升＋タテゴ貸					1	4	1				**6**
白米一升＋タテゴ返						1	1				**2**
金弐拾銭＋安産祈願										1	**1**
金三拾銭＋タテゴ貸					1						**1**
金五拾銭＋祈祷						1	1				**2**
金五拾銭＋タテゴ返納＋願解							1				**1**
金五拾銭＋祈祷＋タテゴ代								1			**1**
金壱円＋祈祷								1			**1**
金百円＋祈祷									1		**1**
宗寿料	3										**3**
タテゴ貸						2	3				**5**
タテゴ借							3				**3**
計	**3**	**2**	**7**	**3**	**3**	**12**	**15**	**4**	**3**	**1**	**53**

以上、「勝善神社受納帳」に記録された奉納物を3種類に分けてその内実を示し、更に祈祷やタテゴの貸借について記述してきた。ここで、大正7年～昭和38年までの奉納物の変遷をまとめたい。大正7年～昭和38年までで最も多く奉納されていたのは、白米一升であった。しかし、より詳細にみていくと、奉納物の変遷がうかがえる。大正期は、他の時期に比べて奉納物の種類が多くみられた。白米・金銭以外で奉納されていたものは、二つ重ねなどの餅や、「塩かま」、「翁餅」といった食品、そして、手拭や蝋燭といった日用品であった。序章においても引用したように、有賀は昭和初期の香典帳を分析することで、当時の香典には「日常のあり合せの品ではならぬとする心持があ」ったことを指摘している［有賀　1968（1934）　208］。これと同様の認識が、「勝善神社受納帳」の記述にも見受けられる。すなわち、「日常のあり合わせの品」ではなく、「塩かま」や「翁餅」、「手拭」や「蝋燭」などのように、購入したものを奉納物として奉納する、という認識である。白米一升の奉納が多数を占めていたものの、白米一升だけでなく、購入したものを併せての奉納がみられることが、この時期の特徴である。購入したものの奉納は大正後期から減少していき、昭和に入る頃には奉納物の大部分は白米一升となり、少数の金銭の奉納がみられる、という状況となっていく。金銭を奉納する場合、奉納金額にきまりはなかったようであるが、時代が新しくなるにつれて奉納金額が高くなっていた。また、昭和30年代には金銭の奉納の割合がゆるやかに上昇しており、後に金銭による奉納へと移り変わっていくことが推察される。

このように、大正期は奉納物の選択の幅が広かったものの、昭和初頭には白米一升に統一されていき、昭和30年代に入ると次第に金銭の割合が大きくなっていった、という奉納物の変遷が指摘できる。

4．考察―「勝善神社受納帳」にみる奉納物に対する共通認識―

前章において記述したように、「勝善神社受納帳」に記録された奉納物は、白米、金銭、白米・金銭以外の3種類に分けられ、参拝者は、この中から1つ、もしくは複数を選択し、奉納していた。S家の側が奉納物を指定することはなかったことから、奉納物の差異は参拝者の選択の結果であり、当時の人々が共有していた奉納物に関する共通認識に基づくものと考えられる。当時の奉納物の基準となっていたものは、最も奉納者数が多かった白米一升である。白米一升と他の他の奉納物、特に金銭はどのように位置づけられるのか。なぜ、白米の奉納が多く行われていたのか。本章では、「勝善神社受納帳」の記述や米価との関わりから検討していく。

まず、「勝善神社受納帳」の記述から、白米一升と金銭、そして、他の奉納物との間の位置づけを捉える。白米との関わりを明らかにするため、白米と金銭が併せて奉納された際の記述に着目すると、写真7に示したように、「白米一升外金拾銭」と記述されている。これは、白米一升の奉納が主で「拾銭」の奉納は副次的な位置にあることを示していると考えられる。また、第3章で

記述したように、昭和 14 年に奉納された金 30 銭は、「白米代」と記されていた。このような記述から、金銭は白米の副次的な位置づけにあったことがうかがえる。

白米は金銭よりも奉納物として相応しいという認識があるものの、金銭での奉納が選択される場合がある。その一つが、参拝者の居住地との関連である。遠方の集落からの代参では、大正年間から現金単体での奉納がみられた。これは、代参を行う人物の負担を考慮してのことと考えられる。大正 13 年に 5 円 20 銭を奉納した講中がある。当時の講員数は定かでないものの、一人あたり 20 銭であったとすると、合計金額が 5 円 20 銭になるためには 26 人から徴収したことになる。白米一升を 26 人分集めるとすると約 40 kgになり、遠方から勝善神社へ代参を行う人物が持参するには大きな負担となる。そのため、金銭での奉納が選択されたと考えられる。

持参することが困難な場合もあるものの、白米一升がふさわしい奉納物であるという認識が存在していたことは、他の奉納物についての記述からも捉えることができる。白米一升に加えて年始（写真 8）や清酒を奉納した記述も、白米一升を書いた後に年始と清酒を記述している。このことから、白米一升は当時の主要な奉納物として認識されていたことが指摘できる。更に、金銭と他の奉納物との位置づけに着目すると、金銭が白米に次ぐ位置づけにあったことがうかがえる。金銭は単体で奉納される場合もあるが、手拭や塩かまと併せて奉納される場合もある。このとき、金額の後に他の奉納物を記している（写真 9）ことから、金銭は白米に準ずるものであり、他の奉納物よりも高い位置づけにあることが指摘できる。

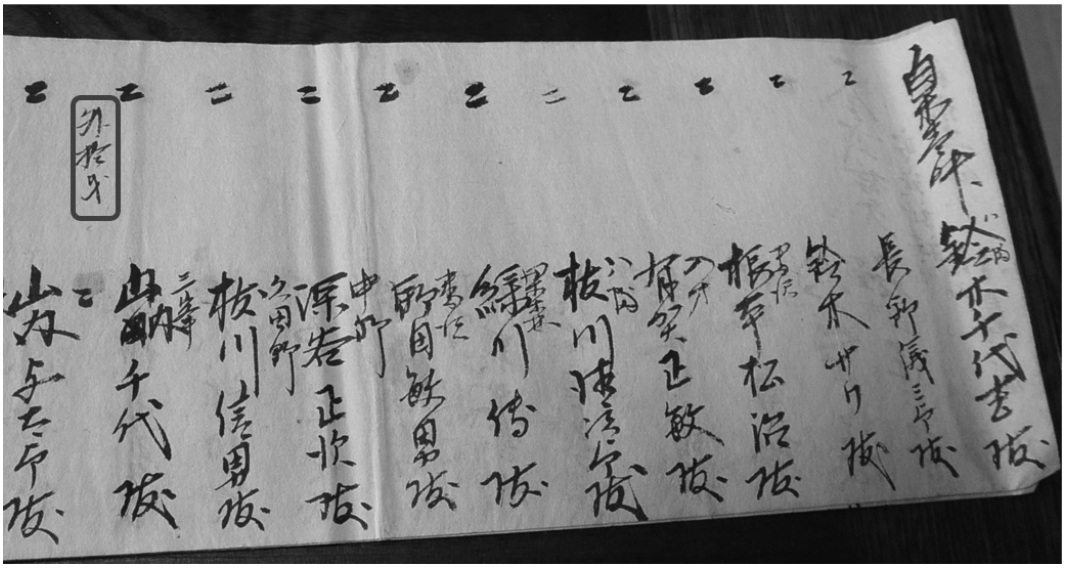

写真7　昭和14年の「白米一升外拾銭」の記録　＊□で囲った箇所が「外拾銭」
（令和2年11月1日筆者撮影）

写真８　大正13年に白米一升と併せて奉納された「年始」の記録
＊□で囲った箇所が「年始」
（令和元年10月23日　筆者撮影）

写真９　大正7年に金銭と併せて奉納された「手拭」と「塩かま」の記録
＊□で囲った箇所が「手拭」と「塩かま」
（令和元年10月23日　筆者撮影）

表8　大正5年～昭和40年の米価の変遷
（杉浦明平［1990］を参照に、筆者算出）

年	大正5年	大正8年	大正11年	大正15年	昭和5年	昭和8年	
白米一升（円）	0.18	0.579	0.51	0.48	0.345	0.285	
年	昭和10年	昭和14年	昭和20年	昭和25年	昭和30年	昭和35年	昭和40年
白米一升（円）	0.375	0.4875	0.9	66.75	126.75	130.5	168.75

では、金銭を奉納する際、奉納金額はどのように決められていたのか。金銭が白米に準ずる位置づけであったことから、当時の米価との関わりから奉納する金額の基準を検討したい。

表8に、大正5（1916）年から昭和40（1965）年までの東京における米価の変遷を示した。先述した昭和14年に白米代として奉納された金額は30銭であったが、当時の東京の米価は約50銭であることが示すように、当時の表郷村と東京の米価を同等に扱うことはできないため、あくまでも参考として用いる。

表8と奉納金額の変遷を示した図4をみることで、米価と奉納金額の変遷に連関がみられる。特に戦後は米価が上昇して100円台となっているが、このときの賽銭の金額も昭和30年代以前よりも大きく上昇し、50～200円を奉納している。その他の年においても、大正8～15年にかけて40銭台後半から50銭台後半で推移していた米価が昭和に入ると下落するように、勝善神社への奉納金額も大正15年前後と昭和初頭では大正15年前後の方が高い傾向がうかがえる。また、20～30銭を奉納する割合が多かった昭和8年の米価は約30銭であるなど、米価の変遷と奉納金額との対応が見受けられる。

このような米価と奉納金額の連関から、米価は奉納金額を決めるための一つの基準になっていたと考えられる。しかし、先ほど白米と金銭との位置づけを確認したように、白米と金銭は等価でない。白米に相当する金額を支払っていたとしても、「勝善神社受納帳」に記されていたように、金銭は白米に準ずる位置づけにあった。なぜ、白米は奉納物として最も高い位置づけにあったのであろうか。

表郷集落では稲作が盛んに行われていたものの、ST氏によると昭和30年代頃までは数年に一度は冷害があり、毎年の収穫量も多くは望めなかったという。日常的には白米よりも白米に雑穀を混ぜた「カテ飯」を食べることが多く、「正月くらいしか白米は食べられなかった」［表郷村史編さん委員会編　2008　155］ようである。このようなST氏の回想や『表郷村史』の記述から、「勝善神社受納帳」が作成された当時、特に昭和30年代以前は白米が貴重なものであり、正月のようなハレの日の食事という認識があったことがうかがえる。ハレの日に食べる貴重な白米を奉納する、ということに意味があったことから、白米一升が当時の奉納物として最もふさわしい、という認識が生じたのではないだろうか。そのため、稲作の技術が進展し、白米一升の値段が上

昇していく昭和30年代には、徐々に金銭での奉納が増加していくこととなったと考えられる。

5．おわりに

本稿では、「勝善神社受納帳」を事例として、奉納物の変遷を示し、そこからうかがえる奉納物に対する人々の共通認識を検討してきた。

勝善神社は牛馬を守護する神社として、祭礼時や牛馬の出産時などに多くの人が参拝していた。特に多くの参拝者があった祭礼時の記録である「勝善神社受納帳」をみると、どの年代においても、白米一升が最も多く奉納されており、白米一升がふさわしい奉納物とする共通認識が存在していたことがうかがえる。しかし、より詳細に奉納物をみていくと、大正期には餅や手拭といった複数の選択肢がみられたものの、昭和に入る頃には白米一升、もしくは金銭へと奉納物の選択肢が狭まり、昭和30年代には次第に白米から金銭による奉納へと変化していく、という変遷がみられた。

日常的に米が貴重であった昭和30年代前半までは、最もふさわしい奉納物は白米一升であり、金銭を始めとするその他の奉納物はあくまで白米に準ずる奉納物であった。ここには、ハレの日の食材としての米の位置づけがあり、ハレの日である祭日には米を奉納しなければならない、という共通認識が存在していたことがうかがえる。奉納金額が米価に応じて変化していることも、白米がふさわしい奉納物として認識されていたことの表れである。しかし、次第に米が日常食へと向かうにつれて、米の奉納から金銭の奉納へ、という変化がみられるようになっていく。

勝善神社に参拝する人々は、祭礼時に参拝し奉納を行うだけではない。馬の出産前には安産祈願を行い、神社のタテゴを借りていく。仔馬が生まれた際には、オビヤやシチヤにあわせて勝善神社に赤飯を奉納する。また、馬が高く売れた際には、お礼参りを行ったり、写真や絵馬を奉納したりすることもあった。このように、牛馬に関わる何らかの機会に応じて奉納や参拝が行われていたことから、神社への奉納は、勝善神社と奉納者との間で行われる一種の贈答であり、奉納者の贈答品に対し、馬の無事な出産や市場での高値、といった利益を勝善神社からの返礼品として捉えることができる。奉納者の側は更なる利益、言い換えれば、更なる勝善神社からの返礼を期待して奉納を行うことで、勝善神社と奉納者との関係が構築されていた。勝善神社が良い馬を産ませた、という確たる証拠はないものの、祭礼時やオビヤなどの機会の勝善神社への奉納物は、日常的な牛馬飼育を円滑に行うための一助となっていたことが推察される。

本稿では、「勝善神社受納帳」に基づき、奉納物の変遷と当時の奉納物に対する共通認識を明らかにしてきたが、最後に、本稿では十分に検討できなかった課題を挙げる。

まず、奉納者と神社との関わりである。本稿では奉納物に着目したため、「勝善神社受納帳」に記載された参拝者の居住地については十分に検討することができなかった。参拝者の居住地、そ

して、参拝者と勝善神社の神職であるＳ家との関係等についても着目することで、当時の奉納物にうかがえる人々の共通認識をより深く追究することができると考える。

また、周辺の寺社との比較である。同じ白河市表郷地区にあり、馬の神として信仰される関山万願寺[8]の祭礼には、赤飯を持参していたという。本稿で扱ったのは、あくまで勝善神社一社の事例である。そのため、本稿から導かれた奉納物にうかがえる共通認識は、一般的なものであったのか、それとも、この神社特有のものであったのかを明らかにするために、他の寺社との比較を行う必要がある。

より広い視点で人と神社、更には人とカミとの関係を捉えることで、奉納物に対する共通認識の変遷を捉えていきたい。

註

(1) 帳面の表題は「勝善神社受納帳」以外に、「奉納勝善神受納」や「勝善神受納帳」など、年によって異なる。本稿では、最も多く表題として用いられている「勝善神社受納帳」を用いることとする。

(2) 欠落している大正 9 ～ 12 年、昭和元・2・4・11・13・15・16、19 ～ 32 年については、祭礼が中止になったという記録はないものの、所在は不明である。年次によって帳面の題が異なることから、本稿では総称として「勝善神社受納帳」を用いる。

(3) 福島県市町村要覧（http://www.fksm.jp/youran/072052.html）を参照（最終閲覧日：2021/05/21）。

(4) 福島県白河市指定の重要有形民俗文化財に登録されている「勝善神社の馬産信仰資料」には、本稿で取り上げる「勝善神社受納帳」の他、神社に奉納された絵馬や写真、神馬像などが含まれている。白河市公式ホームページ　勝善神社の馬産信仰資料（http://www.city.shirakawa.fukushima.jp/sp/page/page001470.html）を参照（最終閲覧日：2022/01/05）。

(5) 笹は勝善神社に近い小松集落の人々が販売していた。小松集落には小松講があり、勝善神社の祭礼時には小松講の人々が手伝いにきていた。小松講の人の中には祝詞をあげるのが上手な人もいたという。講中の女性たちはクマザサの葉を採り、一握りずつ束にしたものを祭礼前日に持ち寄る。駒形の泉にササの束を浸してから神職であるＳ家の前当主が祝詞をあげ、勝善神社の参拝者にクマザサを売っていた［表郷村史編さん委員会編　2008　373］。

(6)「町の通りには、数十の見世物、幾百の露店がずらりと競ふ。その店先に、近郷近在よりの人出が毎日数万人」という記述が、大正 15 年 9 月 14 日に『福島民報』にみられる［金子　2014　2］。大正 11 年の秋の市場では、5 日間で 172 頭の出場があったという。1 頭平均が 65 円で、最高が 400 円、最低が 46 円であった［金子　2014　53］。その後、出場頭数や売却頭数、価格は上昇し、「今年は不景気のため〔中略〕売行は非常に悪」［金子　同上　68］かった年もあるものの、「日本一の馬市」と称される状況が続いた。第二次世界大戦が激化した昭和 18 年以降は馬市が行われなかったようであるが、昭和 21 年に再開されている［金子　同上　91］。

(7) 昭和 38 年は、9 月 29 日～ 10 月 4 日まで馬市を行う予定であった。9 月中に行われた競走馬の市場 2 歳駒以上の市場は開催されたものの、10/1 以降の当歳駒の市は出場頭数がわずか 5 頭となったことから中止となった［金子　2014　109］。

(8) 源義経が兵士討伐の際、戦勝祈願のために立ち寄ったとされる寺［表郷村史編さん委員会編　2008　406］。福島県白河市の南東部、表郷地区に位置する。毎年旧暦 4 月 8 日（現在は、3 月最終日曜日）に花祭りが行われる。この祭礼の際に勝善神社に立ち寄り絵馬を奉納する人もいたようで、勝善神社に奉納された絵馬の日付が関山満願寺の祭礼日となっているものがある。

参考文献

有賀喜左衛門　1968（1934）「不幸音信帳から見た村の生活」『有賀喜左衛門著作集』Ⅴ未来社
伊藤幹治　1995『贈答交換の人類学』筑摩書房
石塚尊俊　1961「お歳暮のはなし」『傳承』6
板橋春雄　1995『葬式と赤飯』煥乎堂
表郷戦争回顧展実行委員会編　2014『表郷の征馬碑』表郷戦争回顧展実行委員会
表郷村史編さん委員会編　2008『表郷村史　第三巻　民俗編』白河市
表郷村文化財保護審議会編　2001『表郷村郷土資料集（第40集）』表郷村教育委員会
金子誠三　2014『新聞記事で綴る日本一の白河馬市』NPO法人しらかわ歴史のまちづくりフォーラム
神崎宣武　1997『おみやげ―贈答と旅の日本文化―』青弓社
斎藤たま　2010『賽銭の民俗誌』論創社
沢田四郎　1966「旅の餞別」『近畿民俗』41
新谷尚紀　2003『なぜ日本人は賽銭を投げるのか―民俗信仰を読み解く―』文藝春秋
杉浦明平　1990「白米」週刊朝日編『値段の明治大正昭和風俗史』朝日新聞社
竹本康弘　1981「衣類の贈答品としての意義―民俗学における贈答研究ノート―」『大和市下研究　7』大和市役所管理部文書課
東京女子大学文理学部民俗調査団　1989『番沢の民俗―福島県白河郡表郷村番沢―』東京女子大学文理学部民俗調査団
西海賢二　1999『絵馬に見る民衆の祈りとかたち』批評社
別府晴海　1976「社交」『講座・比較文化　4（日本人の生活）』研究社
堀内　眞　2020「富士講と奉納物―吉田口を中心に―」『民具研究』160
増田昭子　2001「南会津における祝儀不祝儀の野菜帳」『史苑』62巻1号
山口　睦　2012『贈答の近代』東北大学出版会
柳田國男　1990（1940）「食物と心臓」『柳田國男全集』17　筑摩書房

付記

本研究は、2020年度の日本科学協会の笹川科学研究助成による助成を受けたものである。新型コロナウイルス流行下にも関わらず、写真撮影やインタビューに応じていただいた表郷地区の皆様、そして、勝善神社について多くの点でご教示いただいた白河市歴史民俗資料館・小峰城歴史館の皆様に、深く感謝申し上げる。